和田垣謙三と明治・大正期の経済学界（Ⅰ）

―和田垣の経歴と活動を中心に（2）―

三島　憲之

4、東京大学の経済学担当教官として（1）

―「田尻＝和田垣時代」―

明治17（1884）年に欧州留学より帰国した和田垣は、直ちに東京大学文学部第二科（政治学及理財学科）の理財学担当の講師として、母校の教壇に立つことになった。これは同校における日本人としては初めての経済学を担当する専任教官の誕生であり、和田垣が日本の経済学の歴史において言及されるとすれば、まず第一にこの事実をもって取り上げられなければならないであろう。重要なことがらであり、正確を期すため、このことを記した『東京大学第四年報起明治十六年九月止同十七年十二月』における記述を引用しておく。

…［三月］十七日和田垣謙三文部省准奏任御用掛東京大学文学部勤務ヲ命セラレ尋テ其講師トナル(47)

和田垣が着任する以前の文学部の経済学教育はフェノロサと田尻稲次郎の二人によって行われ、「フェノロサ＝田尻時代」と称されていることは既に述べたが、和田垣の講師就任により、フェノロサは理財学の担当から外れて経済学関係

の科目を離れ、田尻も担当していた理財学の講義を和田垣に譲って、自身は財政学の講義に専念することになった。「フェノロサ＝田尻時代」から「田尻＝和田垣時代」への移行である。[48]

ここで、この文学部時代から東京大学の経済学教育をフェノロサ、ついで和田垣とともに支えた田尻について詳しく述べておく必要があるだろう。田尻は嘉永3（1850）年に薩摩藩士の子として生まれている。[49] 明治2（1869）年に慶應義塾に入門、以降、開成所、海軍操練所、大学南校に学び、明治4（1871）年よりアメリカに留学する。明治8（1875）年にエール大学に入学、初め法律学を学び、後に経済学と財政学を専攻して、明治11（1878）年に卒業するが、引き続き同校の研究科に入学して研究を継続、翌年に帰国している。明治13（1880）年に福沢諭吉の推薦で大蔵省に入省、大隈重信、松方正義の両大蔵卿に重用され、国債局、銀行局、主税局の各局長を歴任し、明治25（1892）年には大蔵次官に就任する。これより、隈板内閣期に一時退官していた時期を除き、明治34（1901）年に会計検査院長に転ずるまでその地位にあった。この間、貴族院議員にも勅選され、大正7（1918）年からは東京市長も務めている。以上の経歴から分かるように、田尻は長く大蔵省の中枢で活躍し、大蔵官僚の指導者的な立場にあった人物であり、自身も大蔵官僚の経験がある大内兵衛が「大蔵省の伝統、今日の官僚精神、その秀才主義、大蔵省風はこの人によって作られたといわれた」[50]と証言しているほど、その影響力は絶大なものがあった。

しかし、田尻は、また、この時期の日本を代表する経済学の研究者、教育者の一人としての顔を持つ人物でもある。既にふれたように「日本人最初の経済学の教官」として、田尻が大蔵省勤務の傍ら東京大学の教壇に立ったのは明治14（1881）年のことであり、これ以降、大正7（1918）年に至るまでしばしば講師を嘱託されて、同校の経済学教育に関わり続けた。後にふれるように法科大学発足直後の一年間は教授を兼官しており、明治21（1888）年には第一回の博士号取得者として法学博士を授与されている。[51] さらに田尻は、明治13（1880）年に現在の専修大学の前身である専修学校を、相馬永胤、目賀田種太郎、駒井重格らと設立している。[52] 専修学校は日本で最初の私立法律学校であっ

たが、創立当初から法律科と並んで経済科を設置しており、これは経済学を教える独立の学科としては最も先駆的なものであったとされ[53]、田尻はこの経済科において晩年まで教鞭を執り続けた。

そして重要なことは、以上のような田尻の大蔵官僚としての側面と東京大学や専修学校における教育者としての側面が、彼の中で極めて密接に連関していたということである。具体的に言えば、田尻は東京大学における教育活動の中で自身が見込んだ有望な学生をリクルートして大蔵省に入省させる役割を果たしていたのであり、さらにはそうした大蔵官僚の中からは専修学校の経済科に講師として送りこまれた人々がいたのである。田尻の伝記である『北雷田尻先生伝』はこのことを次のように記している。

> 先生親しく財政改革、予算の編成、会計法規の整備等の事務に当られ、切に新智識を有する有為の人材を登用するの必要を感ぜらる。阪谷芳郎、添田寿一等、先生の指教を受け、夙に秀才の名あり。其の東京大学を卒業するや、明治十七年大蔵省に於て之を採用せしもの、一に先生の意図に出づるものにして、爾後続々有能の士を集め[54]…

また、水町袈裟六は同様のことをより詳しく次のように証言している。

> 阪谷、添田の両氏は、明治十七年の帝大［原文のママ］出で、大蔵省若手官吏の先輩であつたが、其の後自分は二十四年に出仕し、翌二十五年は若槻［礼次郎］、荒井［賢太郎］両氏が出仕するやうになり、其の後も続々秀才が大蔵省に集まるやうになったのは、全く先生の尽力によるもので、此等の人々が大蔵省に入つて、先生に指導されて、夫々立派な財政家となり得たものであつて、全く先生の力によつて、大蔵省に人材が集まつたのである[55]。

まさにこのような後輩官僚との大学での師弟関係と大蔵省へのリクルーターとしての役割が、田尻の大蔵省における影響力の源泉の一つであったろうことは想像に難くない。事実、鳥谷部春汀は『明治人物小観』（明治35（1902）年刊行）に収録された「大学派の政治系統」という一文で当時の大蔵省における田尻の勢力について次のように評している。

> 属僚組以外に政府部内の一勢力を形つくれるは田尻稲次郎氏の一派なり。大蔵省は此の一派の占有せる城廓にして、大蔵大臣に幾回の交迭ありとも、大蔵省の実権は常に田尻氏に在り。元来田尻氏は藩閥の人なれども其の大蔵省に於ける勢力は経済学者として多数の門下生を有するが為に生じたるものにて必ずしも藩閥の外援を借りたるものにあらず。大蔵省は局長以下の吏僚皆氏の門下生なり。氏と吏僚との関係は師弟の関係にして権力の関係にあらず。[56]

当時の大蔵省がまさに「田尻学校」とも言うべき様相を呈していたことを彷彿とさせるが、以上の引用文中にもあったように、その「第一期生」が阪谷芳郎と添田寿一であり、彼らは専修学校に出講して経済学を教え、また当時の経済問題について雑誌で健筆をふるうなど、[57]田尻とともに「官庁エコノミストの先駆的存在」[58]となったのである。したがって田尻は大蔵省だけでなく当時の経済学界においても、官庁エコノミストの生みの親であり、そのリーダーとして一大勢力を形成していた人物だったわけである。

さて、和田垣の講師就任と同じ年、それまで文学部でのみ教えられていた理財学が法学部にも設置され、この担当者として翌明治18（1885）年に和田垣は法学部への兼勤を命ぜられている。[59]『東京大学第五年報　起明治十七年九月止同十八年十二月』の当該記述を引用しておく。

…［二月］七日東京大学准奏任御用掛文学部講師和田垣謙三法学部兼勤ヲ命セラレ尋テ其講師トナル[60]

これはこの年の末に学部改編があり、第二科（政治学及理財学科）が文学部より分離され、法学部へと移管されて「政治学科」と改称（同時に法学部も「法政学部」と改称）されたことを考えると、その前ぶれをなす重要な事実と言える。そして、明治19（1886）年には帝国大学令が公布・施行され、東京大学は「帝国大学」となり、法政学部は新たに「法科大学」と改称・改組され、以後、大正8（1919）年に経済学部として独立するまでの三十三年間、同校における経済学の教育と研究はこの法科大学の下で行われることとなった。[61]

法科大学の発足と同時に、田尻が大蔵省勤務のまま法科大学教授の兼官を命ぜられ、遅れて和田垣も教授に就任する。『法科大学年報　起明治十八年九月止明治十九年十二月』は「十月六日和田垣謙三法科大学教授ニ任セラル」[62]と記している。田尻は翌年には教授兼官を解かれているので、この時期以降、和田垣は名実ともに同校の経済学教育の中心に立つことになったと言っていい。それでは、この時期の和田垣の講義はいったいどのようなものであったのだろうか。同じ『法科大学年報　起明治十八年九月止明治十九年十二月』に収録されている和田垣の「申報」には、その内容が次のように記されている。

本学年中余カ担当セル学生ハ政治学第二年生同第三年生同第四年生及ヒ法学第二年生トス而メ学科課目ハ政二年生及ヒ法二年生ニ理財学総論政三年生ニ理財学各論同四年生ニ理財史トス

政二年生ニハ毎週四時ノ講授ヲ以テ「フウセット」「ミル」及ヒ「ロッシェル」ノ理財書ニ就キ生財配財及消財ノ原理ヲ充分ニ暁ラシメンコトヲ計レリ

法二年生ニハ毎週二時ノ講授ヲ以テ理財学ノ大要ヲ教示セリ而メ参考書ニハ「フゥセット」ノ著書ヲ用イタリ
政三年生ニハ毎週三時ノ講授ヲ以テ貨幣論銀行論外国貿易論外国為替論労力論等ノ要論ヲ課書ト口授ノ二法ニ依テ詳細ニ履修セシメ且時ニ論文ヲ作ラシメタリ
政四年生ニハ毎週二時間ツツ余ノ編纂セル理財史ヲ英語ヲ以テ口授セリ[63]

これによると、和田垣は政治学科の二年生には「理財学総論」として、フォーセット、ミル、ロッシャーの著書を使用して、生産、分配、消費の原理を教え、三年生には「理財学各論」として貨幣論、銀行論、外国貿易論、外国為替論、労働問題などの要点を学ばせ、四年生には自分の作成した講義ノートを基に英語で経済史の講義を行っている。また法律学科の二年生には参考書にフォーセットの著書を使用して経済学の概要を教えていることが分かる。学説的にはフォーセット、ミルらの古典派経済学とロッシャーのドイツ旧歴史学派経済学との折衷的なものであって、これは田尻が行っていた理財学の講義と共通しており[64]、それをほぼそのままに受け継いだものといっても間違いではないであろう。したがって、この時期には既にドイツ歴史学派の学説が古典派と並列的に紹介され始めており、ドイツから招聘されたラートゲン（Karl Rathgen）が明治15（1882）年から新設された統計学の講義を開始し、経済学における歴史的・統計的研究を重視するドイツ歴史学派の立場を紹介し始めていたこととあわせて[65]、「田尻＝和田垣時代」は「英米流自由主義経済学の受容から、…ドイツ流社会政策学派の活躍に移行する過渡期[66]」とされている。

先の和田垣の講義内容を見る限り、授業では彼がドイツ留学中に接したワグナーやシュモラーらドイツ新歴史学派経済学の学説を本格的に教えることはしていないようであるが[67]、この翌年以降、和田垣は自身の経済学者としての評価を決め、その後の日本の経済学の方向にも影響を与えることとなった重要な論文を相次いで発表している。言うまでもなくそれは「財政学大意」と「講壇社会党」であり、前者は明治20（1887）年に、後者は翌明治21（1888）年に

それぞれ『国家学会雑誌』に発表されたが、特に後者は新歴史学派の社会政策論を本格的に紹介した最初期のものとされ、[68] 住谷悦治はこれが日本の経済学界に与えた影響を次に述べる金井延の諸論文とともに「自由主義経済学に対する弔鐘を撞いたと同時にドイツ流の新経済学への暁鐘を打ち鳴らしたもの」[69]と評している。この住谷の言葉を裏づけるように、高野岩三郎も「大学の連中が社会主義に関心を持つようになったことについては何といっても和田垣教授の存在を第一に挙ぐべきであろう。同教授は明治二十一年三月の「国家学会雑誌」に「講壇社会党」を発表せられ、ついで同じ年の十一月二十五日の大学通俗講演会において「社会主義」と題する講演をせられた…。和田垣教授はドイツ流の講壇社会主義について説かれたのであって、私たちが聞いた講義の中にもそのようなことがあったことを記憶する」[70]と述べている。

しかし、ここで注意しておかなくてはならないことは、「講壇社会党」にしろ、高野がこれと並べて言及している講演「社会主義」にしろ、和田垣は確かにそこで新歴史学派を経済学における有力な新しい動向として紹介してはいるが、必ずしも自身がその立場に立つとは言っていないということである。その証拠に「講壇社会党」の「結論」は次のような文章となっている。

以上記セシ所ハ即チ輓近欧州ノ一隅ニ於テ其ノ嫩芽ヲ萌生シ而シテ今日方ニ発育暢茂シツツアル経済学上ノ一主義ヲ略述セルモノナリ而シテ此説ノ起ルヤ決シテ偶然ニ非ズ欧州輓近ノ大勢コソ実ニコノ問題ヲ発生セシ者ニシテ所謂ル「社会問題」ハ社会ノ発題セル問題ナリ本論ノ如キハ僅々其答案中ノ一ヲ略記シタルノミ敢テ其ノ是非得失ヲ喋々スルニ非ズ会員諸君ノ一考ヲ煩ハスコトヲ得バ幸甚[71]

この文章の「本論ノ如キハ…敢テ其ノ是非得失ヲ喋々スルニ非ズ」という部分が重要である。つまり、この論文はあ

くまで新歴史学派の学説と主張の概説的な紹介にとどまっており、この中において和田垣はその評価にまでは踏み込んでおらず、自分がいかなる経済学上の立場に立つのかについても明言してはいないのである。これに対し、講演「社会主義」の方には和田垣が当時の経済学の潮流をどのように考えていたのかを窺わせる部分があるが、ここでも新歴史学派を支持するとは言っていない。それどころか、和田垣はむしろ古典派経済学に好意的でさえある。

近頃経済社会に国家社会主義一名講壇社会主義或は経済的社会主義と云ふものがあります。これはドイツなどに盛んに行なわれる主義で、ワグネルなど云ふ人は大学の椅子に就きつつ専ら之を主張し、又一方に在ッてはビスマルク宰相の印綬を帯びつつ断然之を実行して居ります。…

又イギリスに於ても、近頃国家社会主義を唱へて従来の自由自治主義に反対するものがあります。経済学を少し学びし人は経済学の本元なる英国に於て。[、] 正統経済学は敗北してしまつたと思ッて「旧学派已に倒れ、新学派已に起れり」などと得意に申しますが、正統経済学派とてドンな所でも、ドンな時でも、ドンな事情に於ても、自由競争主義で押し通さうと云ふのでない。社会全体の公益の為に個々人々の利益を犠牲にすへしと云ふことは、アダム、スミスも、リカルド、マクカロクなども論じて居ります。併し、総て事は極端に走り勝ちのもので、先生より弟子が行き過ぐるもので、英国経済学者もやはり此の弊を免れず、遂に分子的経済学派の名を附けられる様になりました。然らば即ち近時の所謂国家社会主義は自称正統派の敗北と云ふても宜しいが、真誠正統学派は依然として其の尊厳を失はぬものと云ッて宜しからう。[72]

ここではドイツ歴史学派だけでなく、その国際的な波及の影響下に成立したイギリス歴史学派についてもふれながら、しかし、正統的な古典派経済学が決して無条件の自由放任主義を主張するものではないことを強調しつつ、依然として

経済学の中で重要な位置を占めている、と述べているのである。

以上、「講壇社会党」と講演「社会主義」の内容から読みとれるのは、和田垣が新歴史学派の紹介者ではあっても、彼の後輩である金井のように必ずしもその支持者・主張者ではなかったということである。このことは、彼がこの時期以降、次第に経済学関係の研究から遠ざかっていき、入門用の教科書などを除けば生涯を通じてわずかな論文しか書き残さなかったこととあわせて、その経済学の性格を把握するのを困難にしている大きな原因となっている。

5、東京大学の経済学担当教官として（2）
―「和田垣＝金井時代」とその後の和田垣―

明治23（1890）年、金井延が欧州留学より帰国し、法科大学政治学科における理財学担当の教授に就任した。「和田垣＝金井時代」の始まりである。明治26（1893）年に帝国大学に講座制が施行されると、法科大学には法律学関係十七、政治学関係一、そして経済学関係四の合計二十二講座が設置されたが、このとき置かれた経済学関係の四講座のうち、「経済学財政学第一講座」に和田垣が、「経済学財政学第二講座」に金井がそれぞれ担任となったことに、この「和田垣＝金井時代」が象徴されている（残る「経済学財政学第三講座」と「統計学講座」は担任欠員として外国人教師が担当した）。これは、以降、東京大学の経済学が自校で経済学を専攻した卒業生によって中心的に担われるようになったことを示していた。[73] なお、この時、それまでの「理財学」という名称が再び「経済学」へと戻されているが、[74] これを推進したのも和田垣と金井であった。穂積陳重がこの間の事情を次のように記している。

…「経済」という語は、経国済民から出ておって、太宰春台の「経済録」などが適当の用法であることは勿論であるから、明治十四年［正しくは明治12（１８７９）年］の東京大学の規則には「理財学」と改められた。…

しかしながら、字義の穿鑿はとにかく、世間では経済学という語は、神田［孝平］氏以来久しく行われて、既に慣用語となっているし、原語の「ポリチカル・エコノミー」とても、本来充分にその意義を表しているわけではないから、やはり「経済学」という名称に復するのが好いという論が、金井・和田垣両教授などから出て、そこで明治二十六年九月の帝国大学法科大学の学科改正の時から、再び経済学という名称に復したのである。[75]

この金井こそ、ドイツ新歴史学派経済学を日本に体系的に導入し、いわゆる「社会政策学派」を形成して、これをリードした人物である。彼はまた、初代の経済学部長となったことからも分かるように、明治後半期から大正期を通じて長く東京大学の経済学教育の中心を担った人物でもあった。[76] 金井は慶応元（１８６５）年に遠江国（現在の静岡県）に生まれ、東京英語学校、東京大学予備門を経て、明治14（１８８１）年に東京大学文学部に入学している。金井は予備門時代に既に和田垣と出会っており、彼が経済学を専攻するきっかけとなったのも、この和田垣との出会いだったようである。このことを井上哲次郎が次のように回想している。

それは東京大学々生時代（明治十一、二年頃）のことである。吾々同志の者が数人相謀つて晩翠会といふ会を設けて、夜、教場に於いて演説をすることにした。…其の晩翠会といふ名は自分の付けたものであるが、其の時誰々が集つたか、詳しくは憶えないけれども、文学部の同級生和田垣謙三氏、それから法学部の大原鎌三郎氏といふやうな人々が主となつて、而して集まつて来る人々はさう多勢でもなかつたけれども、大抵二、三十人くらいであつたやうに思ふ。…ところが金井博士は其の頃未だ十七、八歳ぐらいで、開成学校［正しくは東京大学予備門］の生

徒であつたらうと思ふ、吾々から見ればずつと後輩であつたけれども、自ら進んで演説をしたいといふ希望であつたから演説をさしたところが、なかなか滔々として弁舌を振つたので、和田垣氏などは大に感心して、後で自分に対して、彼はなかなか活気があつて感心であるから引き立ててやらうではないか、といふやうなことを云つた。それが抑々和田垣氏と金井氏との間に特別の関係を生じ、和田垣氏が当時経済学を遣つて居つたので、金井博士も後、経済学を遣るやうになつたかと思ふ。[77]

金井は明治18（1885）年に文学部を卒業するとラートゲンの助手を務め、翌明治19（1886）年より欧州留学に出発している。彼はまずドイツに着いて、ハイデルベルグ大学でクニース（Karl Gustav Adolf Knies）に、ついでハレー大学でコンラート（Johannes Conrad）に、そしてベルリン大学ではワグナーとシュモラーに師事した。この間、金井は本家ドイツの社会政策学会の会員となっている。明治22（1889）年にはイギリスに渡り、ロンドンのトインビー・ホールを中心に貧民調査に従事し、翌年帰国すると、直ちに法科大学教授に任ぜられたのである。

明治24（1891）年に金井が行った講演「経済学の近況と講壇社会党」は、その演題の通り、欧米各国における経済学の現状を解説しながら、新歴史学派の学問的な優位性を説きつつ、これを日本にも取り入れることを強く主張する内容となっている。この講演で彼はまず、日本の現下の経済学の状況を次のように批判する。

方今本邦に於て経済学を論ずる者は大抵所謂旧派の主義を採る者であつて其金科玉条と恃むものはミル、フオーセットで無ければケーリー、マクラウドの如き者である、偶々新派の経済学を談ずる者も稀にはあれど其れとてもロッシェル氏の英訳位に依りて居るものであります、然るに旧派経済学の如きは社会に関する諸学の最も盛なる独逸国などでは已に五十年来全く打破られたものである、保守の甚だしき英国の如きですらも十四、五年以来旧派の

学派が大いに衰退して来たのであります、然るに日本の経済を論ずる者が尚ほ旧派の主義と採りてミル、フオーセットを金科玉条として居るのは恰も田舎娘が三、四年前に東京に流行した束髪を得意として居ると同じ事である…[78]

ここで金井は、日本では未だに「旧派経済学」、つまり古典派経済学が経済学の主流の位置を占めているけれども、それは社会科学の発展が著しいドイツではもとより、その生誕地であるイギリスにおいてさえ衰退著しく、既に克服された古い学説だと断じ、その上で今なお古典派経済学を信奉することは「恰も田舎娘が三、四年前に東京に流行した束髪を得意として居ると同じ事である」と揶揄までしている。そして、これに続いて新歴史学派の登場とその台頭を次のように紹介している。

…所謂新派の経済学と云ふものは近頃に至りて大に変じて新派の今一歩上にも尚ほ新しき学派が一つ出来て来たのである、此最新の学派と云ふものは非常に勢ひ盛にして彼新派の泰斗と呼ばれたるロッシェル派の学者を圧倒する勢のあるものである、此新派の又新たなるものを私は最新の経済学派と云ふ、この最新の経済学派は独逸墺太利に最も盛でありまして、亜米利加伊太利が之に次で居る、白耳義英吉利が又其次である…[79]

「新派の経済学」、つまり歴史学派の内部から、近年、また新たな学派が誕生し、それが欧米中を席巻している、という。新歴史学派のことである。これを金井は「最新の経済学派」と呼び、そして、この講演の最後では以下のようにその日本への導入を訴えている。

…今日の有様では欧米に於ては旧派の経済学は最早全く衰退して僅に息の音が通ひて居る位な話で早晩全く死に

絶えるに相違ない、新派の経済学…ロッシェル氏を首領として居る歴史派経済学は勢力があるけれども其新派の上にもう一つ学派が起りて来た、其派が将来の学派である、然るに日本に於て前申した通り旧派の主義を採りて居るやうでありては、なかなか欧米と並び立ちて行かうと云ふことは思ひも依らぬことである、我々は迂遠なことを採らずに同じく学ぶならば最新の進歩した所を学ばなければならぬ…[80]

先に引用した和田垣の「講壇社会党」が新歴史学派についてのあくまで客観的中立的な紹介にとどまっており、講演「社会主義」がどちらかと言えば古典派経済学に好意的であったのと比べると、その違いは明らかである。金井は明確に新歴史学派の立場に立ち、その学問的な優位性を確信していることが以上から分かるが、ほとんど同時期に同じような経歴を歩みながら、この両者の経済学上の態度の相違がどこから生じたものなのか、非常に興味深い問題であろう。そして河合栄治郎が「和田垣氏は学壇の先駆者ではあるが、遺憾ながら氏の研究と発表とは之［「講壇社会党」と講演「社会主義」］をさす」を以て切断されて継続しなかつた[81]」と書き、また大内兵衛が「不幸にして和田垣先生はそのパイオニアとしての役目を充分に果したといえないのであるから、金井先生の地位と任務とは甚だ重かったといわねばならない[82]」と評しているように、この頃から金井の活躍に反比例するかのように和田垣は経済学の研究から遠ざかっていくのである。

そして、明治31（１８９８）年、問題の出来事が起きる。すなわち、和田垣が農科大学に転籍し、これに代わって農科大学教授であった松崎蔵之助が「経済学財政学第一講座」の担任となったのである（なお、松崎は明治29（１８９６）年より法科大学教授兼任として「統計学講座」を担任していた）。「和田垣＝金井時代」から「金井＝松崎時代」への転換である[83]。松崎は明治21（１８８８）年の法科大学政治学科卒業であるから[84]、和田垣の教え子ということになる。明治時代の帝国大学で担当者がその講座を外され、他学部に移されるということは、極めて異例の事態と言えるであろう。

フェノロサにしろ、田尻にしろ、いずれもその地位は初めから同校において専任教官が育つまでという暫定的な意味合いがあったが、和田垣はこれとは違う。農科大学にはその前身である駒場農学校、東京山林学校時代から「理財学」が科目として設置されてはいたが[85]、これによって和田垣が東京大学の経済学の主流から弾き出されたということは否めない。このことについては神戸正雄が次のように書いている。

先生の一生に於て特に感興を喚くのは、先生が夙く本郷の本家を後進に譲りて駒場の隠宅に隠れられたる事実である。又先生が最も多く児分を作り得べき地位にありながら遂に全く之に意を用ひず、学界に於て自家勢力の扶植を計られなかつたことである。独逸では学界の先輩は児分を作ることに力を用ひる。排儕が頗る広く行はるるのみならず、先輩が後進を抑ふることすら少なくない。而して独逸系の学問を輸入されたる和田垣先生が此等の弊風を輸入せられなかつたのは亦先生の人格の発露であり、学界は正に此点に於ても先生に感謝すべきである。[86]

この文章でまず注意を引くのが「本郷の本家」、「駒場の隠宅」という表現である。前者が法科大学、後者が農科大学をさしていることは言うまでもないが、この表現は明らかに同校の経済学の主流が前者にあり、和田垣が後者に移ったことはそこから外されたことを意味するという先の見方を裏づけている。これを神戸は和田垣が後進に道を譲ったという話として紹介し、和田垣に権勢欲がなく、学界に自分の勢力を築かなかったこととあわせて褒め称えているが、果たしてこの出来事が本当にこのような美談であったのかは、おおいに疑問であると言わなければならない。

しかし、そのことを検討する前に、和田垣の後任者となった松崎蔵之助の人物像と当時の法科大学内部の人間関係についてふれておく必要がある。松崎は金井と同じ慶応元（1865）年に上総国（現在の千葉県）の請西藩士の子として生まれ、東京大学予備門を経て、明治17（1884）年に東京大学文学部に入学する。その後、法科大学に転じてこ

こを卒業、大学院に入学し、明治23（1890）年には農科大学助教授に任ぜられ、明治29（1896）年に教授へと昇格、この間、彼はドイツとフランスに留学している。松崎の業績は主に農政学と財政学の分野にあり、前者ではその農業保護論が、後者では国民経済に対する国家財政の優位を体系化したワグナー流のそれを集大成したことがその特色と言われ[87]、彼の門下生には柳田国男[88]、河上肇、大内兵衛、土方成美などがいた。このうち、河上はその有名な『自叙伝』において、また大内も『経済学五十年』において、かなり長く松崎についてふれているが、それらはいずれも「この恩師に対し、不幸にも私は余り好い思い出を有っていない[89]」、「つまらぬ先生であった[90]」といった調子の、全面に強い拒絶感が漂う否定的なもので、特に大内は罵倒に近い酷評を行っており、二人とも松崎との間に深い感情的な相克があったことを窺わせている。大内はさらに松崎を「相当な野心家[91]」と評しているが、これは松崎の人物像、ひいてはここで検討しようとしている和田垣の農科大学への転籍という「事件」に関しても、かなり重要な示唆を与えるキーワードと思える。

それでは、この時期の法科大学内部の人間関係はどのようなものであったのだろうか。河合栄治郎の筆による金井の伝記によれば、それは次のようなものであった。

…純法律学と政治学経済学とは自ら性質も違ふので、法科大学の中でも政治経済の人々が一つのグループを為していた、そして其の首領の地位にいたのが金井であった。

松崎氏は…妙に彼［金井のこと］と親しまず法律学の先輩と交はり、此のグループからは孤立していた。従って政治経済のグループにも二派あることになつて、河津［暹］氏は何れかと云へば松崎氏に親しかつた。明治三十五年に松崎氏の推薦する経済学の助教授に対立して、別に山崎覚次郎氏を迎へることが政治経済グループの人々の間に問題となり、法律学の先輩は松崎氏を助けて、相当に激化した状勢となつた[92]。

同様のことを松崎の門下にして、その後継者と目された土方成美は次のように書いている。

私が東大を卒業して東大の特選給費生…として、東大に残ろうとした頃の事である。ある教授から、遺憾ながら東大の経済関係の教授の間には、金井（延）派と松崎（蔵之助）派がある。金井派の教授としては山崎覚次郎、高野岩三郎、矢作栄蔵、河津暹等の教授があり、松崎派の教授としては松尾均平教授、渡辺鉄蔵助教授があるとの事であった。…何故に、金井派と松崎派とが分れたかについて詳しいことは知らないが、何しろ、金井教授は当時経済学界の元老であり、他方松崎教授は東京高等商業学校（今日の一橋大学の前身）長を兼ね、中々羽振りがよかったので、自然対立の形となったのであろう。

その外に山崎覚次郎教授が、ドイツへの私費留学から帰朝して、東大（当時は法科大学）教授に推薦せられた時、岡野敬次郎、松崎蔵之助氏などがこれに反対して、松尾均平氏を推したことがあったとか、後に両氏とも教授になられたが、このようないきさつが両派の溝を深くしたのではないかと思っている。[93]

以上を総合すると、法科大学内部はまず法律学と政治学、経済学という専攻を異にする教授たちの間で大きく色分けされており、さらにこの政治学、経済学専攻の教授たちの間が「金井派」と「松崎派」に分かれていたということになる。そして「金井派」の方が多数派ではあったが、松崎は岡野ら法律学専攻の教授たちと連携してこれに対抗していた、という図式に整理できるであろう。後に昭和に入ってからの経済学部は、河合、土方らの対立を中心に激しい派閥抗争を引き起こし、「平賀粛学」という最悪の結果を招くこととなったが、[94]そうした体質の芽はこの「金井＝松崎時代」に既にあったと言ってもいいかもしれない。[95]もちろん、河合、土方とも和田垣が既に去り、代わりに松崎が法科大学に移ってきた後の状況を描いているのだが、ここから推測されるのは「相当な野心家」である松崎が自身の法科大学への転籍

を図るため、特に法律学専攻の教授たちに対してかなりの働きかけを行っていたのではないか、ということである。さらに松崎は、専任教官ではないとはいえ、官界と学界の両方に隠然たる影響力を持つ田尻と極めて親しく、「[松崎は田尻を] 常に先生々々と慈父の如く慕ひ居るが、博士 [田尻のこと] は蔵が蔵がと自分の子供に接するが如く愛して居られる」[96] ほどの関係だったという。しかも二人とも財政学が専門である。

ただし、松崎がいくら法律学専攻の教授たちや田尻を通じて自分の人事に関する運動をしていたからといっても、それがそのまま和田垣が法科大学から追い出される理由にはならないであろう。松崎を兼任していた講座か欠員だった講座の専任教官にすればよいだけのことだからである。また、和田垣と金井の関係は依然として良好であり[97]、和田垣の側になにも問題がないのに、このような常識破りの人事が行われたとは考えにくい。そこで浮かび上がるのが、これは和田垣が語られるときに必ずといっていいほど持ち出されるエピソードでもあるが、そのあまりにも奔放すぎる講義スタイルが問題視されたということであろう。当時出講していた東京高等商業学校での話だが、飯田旗郎が和田垣の講義について次のように述べている。

> …其講義たるや同君一流の特有の経済学で、真面目に経済学の原則を列挙して説明するといふやうなことはせず、経済学という名称の下に、滑稽諧謔も交へれば、又謡曲や英文の講義もやるし、和歌俳句を加へれば、美術論が出るといふ様な調子で、…同僚教授の中には、和田垣君の教授振りの放漫なるを攻撃して止まぬ人があったが、同君は斯かる攻撃にあっても、何処に風が吹くかというやうな顔附きで、依然として和田垣式経済学を平気で講演していた[98]…

当然、このことは東大でも問題となっていた。山崎覚次郎が次のように回想している。

明治十九年か二十年の頃「ミル」の経済論を、帝大の…教室で教はりました。所が先生はご存じの通りで、時にはハンドオルガンを持って来られて講義を途中で止められたこともあります。…［農科大学へ移ってからも］一週に二度位本郷にも来られて経済史の講義をされて居りました。所がその経済史の講義がいつも兎糞録めいたり、又は吐雲録式の話が多いので、…同僚の教授連の側から反対が出まして、先生に兎糞録式の講義を止めるやうに頼みに行く役を私が言いつかり、…先生に申し上げたのです。…農大の方にも先生の講義が問題となり、学長などから矢作［栄蔵］君にこの事を先生に忠告するように言はれたのであります。[99]

和田垣がなぜこのような破天荒な講義スタイルをとったのか、その意図と背景については別に詳しく検討する予定であるけれども、このことがこの人事の最大の原因となっていたと考えるのが最も可能性が高いと思われる。以上のことをまとめると、研究活動は早々に放棄し、脱線講義が問題視されていたところに、野心的な後輩がその席を狙って運動を始め、彼と近い法律学専攻の教授たちの主導により和田垣は農科大学へと転籍させられた、というのがこの出来事をめぐる真相だったのではないだろうか。

農科大学に移った和田垣は「農政学・経済学講座」の担任となり、これが明治41（１９０８）年に第一講座と第二講座に分割されると、その第一講座の初代担任となった。[100] 和田垣が去った後、明治41（１９０８）年の経済学科、翌年の商業学科の新設を経て、[101] 大正８（１９１９）年には経済学部として独立するに至るが、この間、先の山崎の回想の中にもあったように和田垣は法科大学との縁が全く切れてしまったわけではなく、「経済学史」の講義を受け持つなど、[102] その経済学教育に関わり続けている。

（以下次号）

註

(47) 東京大学史史料研究会編『史料叢書　東京大学史　東京大学年報　第二巻』（東京大学出版会、１９９３）３４１頁。
(48) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８７９頁。
(49) 田尻の経歴については、『北雷田尻先生伝　上巻』（田尻先生伝記及遺稿編纂会、１９３３）の「第一編　閲歴」、および同書『下巻』に収録されている「田尻先生年譜」を参照。
(50) 大内兵衛『経済学五十年』（東京大学出版会、１９６０）１５頁。
(51) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８７６～８７７頁。
(52) 専修学校については、専修大学編『専修大学百年史』全二巻（専修大学出版局、１９８６）を参照。
(53) 前掲『専修大学百年史　上巻』１６６～１６７、１７１～１７２頁。
(54) 前掲『北雷田尻先生伝　上巻』３６頁。
(55) 前掲『北雷田尻先生伝　上巻』３０８～３０９頁。
(56) 大内兵衛「財政学者としての田尻博士」８６頁、大内『旧師旧友』（岩波書店、１９４８）所収、より引用。この鳥谷部の文章を受けて大内は、「況んや先生の下僚はたいてい帝大において先生から直接に教を受け先生の手によって大蔵省の官吏となったのである。先輩としての先生と、先生としての先輩とにおいて、之等の人々が崇拝の的を得たのは或いはむしろ自然であったといってよいであろう。」（同書８７頁）としている。
(57) 阪谷芳郎については、小峰保栄「阪谷芳郎の学者像 ― 専修学校講師時代の先生 ―」、『専修商学論集　第19号』（１９７５）所収、添田寿一については、杉原四郎「添田寿一」、杉原『日本のエコノミスト』（日本評論社、１９８４）所収、西川俊作「添田寿一 ― 明治のテクノクラート」、西川『福沢諭吉と三人の後進たち』（日本評論社、１９８５）所収、をそれぞれ参照。
(58) 前掲杉原「添田寿一」６４頁。
(59) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』３８～３９頁、および前掲『東京大学経済学部五十年史』１１９５頁。
(60) 前掲『史料叢書　東京大学史　東京大学年報　第二巻』４５１頁。
(61) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８８２頁。

(62) 東京大学史史料研究会編『史料叢書　東京大学史　東京大学年報　第五巻』（東京大学出版会、１９９４）８頁。
(63) 前掲『史料叢書　東京大学史　東京大学年報　第五巻』１８頁。
(64) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８７７頁。
(65) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８７９頁。ラートゲン（１８５５―１９２１）はワイマールに生まれ、１８８２年に来日、主に政治学、行政学を担当、東京大学のほかにも独逸学協会学校の講師を兼務し、また農商務省の嘱託として取引所関係法規の調査・立案にも参画、１８９０年に帰国し、ベルリン大学講師、ハイデルベルグ大学教授などを歴任した（前掲経済学史学会編『経済思想史辞典』４２５頁を参照）。
(66) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８７９頁。
(67) ただし政治学科の三年生に「理財学各論」の一部として「労力論」を教えたとあるので、この際に新歴史学派の社会政策論を紹介している可能性はある。なお、東京大学史史料研究会編『史料叢書　東京大学史　東京大学年報』全六巻（東京大学出版会、１９９３―１９９４）には和田垣の「申報」が、本文中に引用した『法科大学年報　起明治十八年九月止明治十九年十二月』に記載されているもののほかに、翌年度以降の『法科大学年報　自明治二十年一月至同十二月』、『法科大学年報　自二十一年一月至同十二月』、『明治二十二年申報　法科大学』の中にも存在するが、年々、その内容は粗く簡略化されていき、参考になるような記述はほとんどない（前掲『史料叢書　東京大学史　東京大学年報　第五巻』３４５頁、同書『第六巻』９０頁、２５５頁）。
(68) これより以前、明治19（１８８６）～20（１８８７）年に刊行されている中川恒次郎『経済実学講義』全二巻が日本におけるドイツ歴史学派の最初の導入書とされ、ここでも新歴史学派の社会政策論が紹介されている（前掲堀『増訂版　明治経済思想史』５６～５７頁、４５８～４６８頁を参照）。
(69) 住谷悦治『日本経済学史　増訂版』（ミネルヴァ書房、１９６７）１５８頁。
(70) 高野岩三郎「「社会政策学会」創立のころ―私の最初の外遊まで―」９１～９２頁、高野著・鈴木鴻一郎編『かっぱの屁』（法政大学出版局、１９６１）所収。
(71) 前掲和田垣「講壇社会党」１４１～１４２頁。
(72) 和田垣謙三「社会主義」７１～７２頁、『東洋学芸雑誌　第六巻第八十九号』（１８８９）所収。
(73) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』８８５～８８７頁。なお、以下では現在の東京大学までを含む全体をさして「東京大学」という呼称を用いている。また、帝国大学は明治30（１８９７）年に京都帝国大学が新設されたのにともない、東京帝

国大学と改称している。

(74) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』884頁。

(75) 穂積陳重『法窓夜話』(1926、岩波文庫、1980) 194～195頁。

(76) 金井の経歴については、河合栄治郎『金井延の生涯と学蹟』(日本評論社、1939) の「伝記」を参照。

(77) 井上哲次郎「金井延博士に対する追憶談」281～282頁、前掲河合『金井延の生涯と学蹟』所収。

(78) 金井延「経済学の近況と講壇社会党」424～425頁、前掲河合『金井延の生涯と学蹟』所収。

(79) 前掲金井「経済学の近況と講壇社会党」425頁。

(80) 前掲金井「経済学の近況と講壇社会党」440頁。

(81) 前掲河合『金井延の生涯と学蹟』68頁。

(82) 大内兵衛「金井先生の憶い出」39頁、前掲大内『旧師旧友』所収。初出は前掲河合『金井延の生涯と学蹟』の「諸家の追憶」に掲載。

(83) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』887頁。

(84) 松崎の経歴については、吉田震太郎「官学におけるドイツ財政学の輸入 — 松崎蔵之助」、佐藤進編『日本の財政学 — その先駆者の群像 —』(ぎょうせい、1986) 所収、を参照。

(85) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史　部局史　二』(東京大学出版会、1987) 651、654頁。なお、駒場農学校は明治7 (1874) 年に内務省勧業寮の下に設置された農事修学場が明治11 (1878) 年に農学校となり、明治15 (1882) 年に改称されたものであり、東京山林学校は明治15 (1882) 年に農商務省山林局の下に設立されている。両校が明治19 (1886) 年に合併して東京農林学校となり、明治23 (1890) 年に帝国大学の分科大学として農科大学となった (前掲『東京大学百年史　部局史　二』647～658頁を参照)。

(86) 神戸正雄「和田垣教授在職二十五年祝賀」455～456頁、和田垣謙三『西遊スケッチ』(至誠堂、1915) 所収。初出は京都帝国大学法科大学の『経済論叢　第一巻第一号』(1915) に掲載。

(87) 松崎の業績については、前掲吉田「官学におけるドイツ財政学の輸入 — 松崎蔵之助」のほかに、前掲『東京大学百年史　部局史　一』894～896頁を参照。

(88) 松崎と柳田の関係については、藤井隆至『柳田国男　経世済民の学』(名古屋大学出版会、1995) を参照。

(89) 杉原四郎・一海知義編『河上肇　自叙伝 (五)』(岩波文庫、1997) 40頁。

(90) 前掲大内『経済学五十年』３１頁。
(91) 前掲大内『経済学五十年』３１頁。
(92) 前掲河合『金井延の生涯と学蹟』２０３頁。
(93) 土方成美『学界春秋記』（中央経済社、１９６０）１０１～１０２頁。
(94) 昭和戦前期における経済学部の派閥抗争と「平賀粛学」の顛末については、竹内洋『大学という病 ― 東大紛擾と教授群像』（中公叢書、２００１）が詳しい。
(95) ただし土方は松崎の死去（大正８（１９１９）年）と松尾の転出によって、「この両派の対立は事実上解消していた」（前掲土方『学界春秋記』１０２頁）と言っている。また、竹内洋は「もっとも金井派と松崎派というのは、あとの時代の多数派と少数派に比べれば、どこにでもある人間関係の濃淡による仲間集団といった体のものだった。排他的とはいえないクリーク（clique）といった集団だった」（前掲竹内『大学という病 ― 東大紛擾と教授群像』１１１頁）と分析している。
(96) 瀧興治の回想、前掲『北雷田尻先生伝　上巻』３７４頁。
(97) 河合は金井の伝記に「先輩としては和田垣謙三氏とは一番親しく、氏とは学生時代の知合ひでもあり、少い経済学の同僚教授であつたこともあらう、帰朝後十年間位は殆ど和田垣氏と行動を共にしていた」と書いている（前掲河合『金井延の生涯と学蹟』２４２頁）。
(98) 飯田旗郎「痛快なる交友和田垣君を回想す」６２４～６２５頁、前掲大町『和田垣博士傑作集』所収。
(99) 山崎覚次郎「答案を出さない試験」７～９頁、前掲澁木『吐雲餘影』所収。なお、農科大学移籍後の和田垣の法科大学での担当科目名は、引用文中にある「経済史」ではなく、「経済学史」が正しいようである（註(102)を参照）。
(100) 前掲『東京大学百年史　部局史　二』９４９～９５０頁。
(101) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』９０４～９０５頁。
(102) 前掲『東京大学百年史　部局史　一』９１５頁。

[訂正]

本誌前号掲載の拙稿中、４０頁１行目以下を次のように訂正します。

誤　「さらに明治14（１８８１）年には文学部は三学科制となり、第一科（「哲学科」）、第二科（「和漢文学科」）と並んで第三科（「政治学及理財学科」）が設置され、」

正　「さらに明治14（１８８１）年には文学部は三学科制となり、第一科（「哲学科」）、第三科（「和漢文学科」）と並んで第二科（「政治学及理財学科」）が設置され、」